
詩『火伏せの神の下で』

もりそば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩『火伏せの神の下で』

【Nコード】

N2123P

【作者名】

もりそば

【あらすじ】

詩、的なものだと思われ（断定しろ！）
うん、続かない……。

紅葉の中で君を思う

人の知らぬ 火伏せの神の下で

十拳剣かそれとも白炎か

君がどちらで私がどちらか

判断する情報を持たない自分

君は鳥居の上から云った

私はその下の石段で訊いた

お前は銑鉄

一度溶かされ剣の形を失ったと

お前を溶かしたのはボクなのだと

私は下から君に云った

君は鳥居の上で訊いた

君は炎だったんだね

真っ白で 残酷なまでの浄化の炎

君を閉じ込めていたのは私なのだと

静かに風

刃に惹かれた訳じゃない

私は刃に引かれた

時で折り返し続けた銑鉄は剣となり

その剣は君の炎に昇華された

そうだ

私は完全であった過去を取り戻したかった
一振りの剣だった自分を
だから私は刀に心を移そうとした
でも私はもう剣ではない

私は空を仰いで微笑む
そこに居た君は怪訝な顔

剣を溶かして檻
君という炎を燃やして動くこの身体
私はすでに炉心
檻という名の炉心

私はまだ未完
安定を欠いては刃を求める
けれど私は刃に戻ろうとは思わない

刃は炎と相容れず
相容れるは器と炎

本当に欲しいのは火属の他人
私の完全なる対存在
また一歩君に近づいた

一方的なモノローグ
終えた私と呆れ顔の君

この馬鹿

そっぽを向いた君を見て笑い
私は街を見下ろす

紅葉の中で君を思う
人の知らぬ 火伏せの神の下で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2123p/>

詩『火伏せの神の下で』

2011年1月24日04時36分発行